かささぎ 通信 第42号

2016年2月19日　発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　　「森三郎の作品を読む会」

二〇一六年一月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和9年4月号初出の三作品を読みました。「トンネル」、「子守」、「餅」

「子守」・・・水島信一

「子守」というと、森三郎さんの作品では、『赤い鳥』昭和8年5月号の「パチンコ」を思い出します。製紙工場で働く両親に代わって弟の子守をする小学五年生の少年が登場しました。彼は、弟を背中におぶって、兵隊ごっこをして遊んでいました。（「かささぎ通信」第30号参照）小泉和子編「女中がいた昭和」（発行・河出書房新社）には、幼い弟妹を背負って元気に遊ぶ子供のことを紹介した後で、戦前まではこうした「きょうだい子守」とは別に、他家に子守奉公に出された少女たちも少なくなかった、と書かれています。

今回読んだ「子守」は、その後者の方で、五歳だった主人公「私」の目を通して、弟の子守として来ていた十三歳のお糸のことを回想した話です。森三郎さんは、昭和9年2月号「秋蝉」・「風船虫」、3月号「角兵衛獅子」（「かささぎ通信」第40号～41号参照）に続いて、4月号のこの「子守」でも、十三歳にして変動する社会の中に身を置く子どもを描いています。

お糸は、お母さんが夕飯の支度で忙しい時、弟と私の面倒をみています。お糸の役目は、家事全般の見習いというより、純然たる子守だったと想像できます。私はお糸が好きでした。時には、お糸のことがしゃくにさわって、お母さんにお糸を悪く言いつけますが、お母さんは我が子の言葉を一方的に信じたりはしませんでした。我が子のしつけの意味もありますが、「子守」の少女を隷属的に扱ってはいないことを感じさせます。

当時は給金をもらえない子守もいたようですが、お糸は縁日で自由に使える小遣いを持っていたので、給金が出ていたのでしょう。お糸は私のおばあさんとも良い関係だったこと、買ってもらった半襟を大事にしていたことなど、短い作品の中に、母・私・お糸の三人の心情を描くエピソードを設定しているところに、作者の意図が感じられます。

「餅」・・・森三郎

この話は、順一と隣の席の松浦君とのちょっとしたいさかいを題材にしています。松浦君は、二時間目の算術の時間に順一がそっとあくびをしたことを見逃さず、先生に言いつけます。それで二人は言い争いをしますが、五時間目にはもう松浦君は、大法寺の餅投げがあるから、いっしょに行こうと順一を誘います。今朝のことにこだわりを持っている順一は「いやだ」と押し通します。でも家に帰ると、弟が餅投げに行くことを楽しみに待っていて、結局、順一は餅投げに行き、松浦君から、餅を一つもらいます。松浦君の屈託のなさにホッとしたのでしょうか、順一は「明日も二人三脚の鬼ごっこをしようね」と松浦君に呼びかけます。一日の中のたったそれだけのやりとりですが、「うん、きっとね」とにこにこして言う松浦君の笑顔が、読者をも安堵させます。

こんな場面は他の森三郎童話作品にもあったと、探してみると、昭和8年4月号「けんかの後」、10月号「ハーモニカ」も、「餅」同様に、けんかをしたもの同士の仲直りを予感させて終わっています。

ところで、「けんかの後」の昌二さんは「妙蓮寺」の子で、「子守」の中で私がお糸によく連れていってもらったお寺の名前も「妙蓮寺」でした。不思議な一致です。森三郎さんの頭の中には、童話の世界のイメージ地図があったのでしょう。

次回予定　平成28年3月11日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和9年6月号初出作品

「運動会」、「竹ようかん」、「ワップル焼」